

一般選抜・関連科目

- 心理学（概論）または福祉心理学に関する問題
（対象：福祉心理学分野・臨床心理学分野共通）

【問題】

生涯にわたるウェルビーイングの実現のために「心理学」が考えなければならないことはどんなことか、論述しなさい。

【解答 or 解答例】

エリクソンのライフサイクルとライフステージの考え方にに基づき、人生をどのように考えていくことが必要になってくるのかについて論じるとすれば、福祉心理学でいうところの一人一人のしあわせの追求と、QOL（生活の質）にまず視点を置くべきであろう。そのような観点で、ライフステージを見ていったとき、人々は簡単にライフサイクルを生きているわけではなく、いろいろな問題と格闘しながら、時にはいい意味での妥協を行って生きていることがわかる。一つ一つのつまづきを取り上げてみると、そこには「心理学」の理論を応用した援助がみえてくることになる。例えば、幼少期における虐待と愛着の問題、思春期の自我の形成の問題、中年期の自己との向き合いなど、老年期までに様々な問題と格闘しながら成長を図っていくのである。

【出題意図】

「心理学」の応用分野に「福祉心理学」がある。「福祉心理学」は人々の生き方に大きく関与する学問である。その意味からも「臨床心理分野」「福祉心理分野」両方にとっても「福祉心理学」のライフサイクルとアイデンティティをしっかりと正しく理解しておくことは欠かせないものである。今回の出題では、この重要性をどのように理解しているかを問うた次第である。

●用語説明に関する問題

(対象：福祉心理学分野・臨床心理学分野共通)

【問題】

次の(1)から(4)のうち2つを選び、学術的背景や関連する専門用語に触れながら説明しなさい。なお、解答にあたっては所定欄に選んだ用語・概念の番号を必ず記入すること。

- (1) 相関関係と因果関係
- (2) 感情経験と生理的覚醒
- (3) ホメオスタシスと感覚遮断実験
- (4) 文化的自己観

【解答 or 解答例】

(1) 相関関係と因果関係

相関関係と因果関係は、どちらも2変数間の結びつきを表す概念であるが、その性質は大きく異なる。心理学研究において、相関関係と因果関係の峻別は、現象のメカニズムを解明する上で極めて重要である。相関関係とは、2つの変数の間で、一方の変数が変化する際、他方も一定の規則性を持って変化する統計的な連動性を指す。これには正の相関と負の相関があるが、あくまで数値上の随伴現象に過ぎず、どちらが原因でどちらが結果であるかという時間的・論理的順序を問わないものである。一方、因果関係は、ある先行事象が後続事象を直接的に引き起こす決定的な関係性を指す。因果の成立には、変数の共変、時間的先行性、および第三の変数による影響の排除という三条件が不可欠である。心理学において特に留意すべきは、直接的な因果がないにもかかわらず相関が見られる擬似相関である。例えば、子供の語彙力と靴のサイズに正の相関があっても、それは加齢という共通要因が両者に影響しているに過ぎない。このような攪乱変数による誤謬を避けるため、心理学では操作と統制を用いた実験法が重視される。独立変数を操作し、他の条件を一定に保つことで初めて、観測された変化が特定の要因に帰属するもの、すなわち因果関係があると証明できる。

(2) 感情経験と生理的覚醒

感情経験と生理的覚醒の関係については、感情心理学において長く議論されてきている。初期の理論としてジェームズ＝ランゲ説があるが、この説では末梢神経系の生理的変化が感情経験を直接引き起こすと説いた。これに対し、キャノン＝バード説では、視床を介して生理的覚醒と感情経験

が独立かつ同時に生じると説明されている。現代の心理学において主流となったのは、シャクターとシンガーによる情動二要因論である。この理論では、感情が生じるには生理的覚醒という身体的状態に加え、その覚醒がなぜ生じたかを解釈する認知的ラベル付けが必要であると論じている。例えば、吊り橋の上での動悸を恐怖ではなく恋心と誤認する生理的覚醒の誤帰属は、覚醒自体は未分化であり、文脈に応じた認知が感情の質を決定することを示唆している。しかし、その後の研究では、怒りと恐怖で異なる自律神経反応が見られるなど、特定の感情に固有の生理的パターンが存在する可能性も指摘されている。結論として、感情経験は生理的覚醒を基盤としつつも、個人の認知評価や社会的文脈が複雑に相互作用することで成立する多層的なプロセスであるといえる。

(3) ホメオスタシスと感覚遮断実験

ホメオスタシス（恒常性）とは、外部環境の変化にかかわらず、体温や血糖値などの内部状態を一定の範囲内に維持しようとする生体の調節機構を指す。心理学においては、この概念が動機づけの理論に応用され、不均衡が生じた際にそれを解消しようとする動因低減説の根拠となった。このホメオスタシスの概念は、感覚刺激の受容という側面にも適用できる。人間には、覚醒水準を最適に保とうとする最適覚醒水準が存在すると考えられており、これを実証的に検討したのがヘップラによる感覚遮断実験である。この実験では、被験者を防音室に隔離し、視覚や触覚の刺激を極限まで制限した。その結果、被験者は思考の混乱や集中力の低下をきたし、存在しない刺激を補完しようとする幻覚や妄想を経験することが示された。これらの知見は、生体が単に内部の平穏を保つだけでなく、適切な外部刺激を取り入れることによって精神的なホメオスタシスを維持していることを示唆している。刺激が過剰な状態だけでなく、過少な状態もまた生体にとってのストレスとなり、正常な認知機能を維持するためには、環境との適度な相互作用が不可欠であることが理解できる。

(4) 文化的自己観

文化的自己観とは、個人が自己をどのように定義し、他者や社会とどのように関連づけるかという認識の枠組みであり、所属する文化圏によって異なるとされる。マーカスと北山は「相互独立的自己観」と「相互協調的自己観」といった2種の文化的自己観があることを示した。欧米圏に多く見られる相互独立的自己観では、自己を他者や文脈から切り離された固有の属性（能力、性格など）の集合体と捉える。個人の独自性や自律性が重視され、行動の源泉は内面的な意図に帰属される傾向がある。一方、日本を含む東アジア圏に顕著な相互協調的自己観では、自己を他者との関係性や社会的文脈の中に位置づける。周囲との調和や役割の遂行が優先され、自己の境界は流動的で、他者の期待に応えることが行動の動機となりやすい。これらの自己観の相違は、認知、感情、動機づけのプロセスに深く影響する。例えば、独立的自己観では自己を高める「自己高揚」が、協調的自

己観では欠点を修正しようとする「自己批判」が働きやすい。このように、文化によってもたらされた自己観は個人の心理プロセスの深層に影響を与えている。

【出題意図】

心理学一般における基本的な概念を、相互に関連付けて位置づけ、論じられるかどうかを問うため。

- 心理学（発達、臨床、社会、教育）に関する問題
（対象：福祉心理学分野）

【問題】

視覚的断崖装置を使って生後 1 年くらいの子どもに行った実験では、視覚的断崖の前で進めなくなった子 どもでも、母親の安心した笑顔を確認することによって透明な板の上を進むことができるといふ、社会的参照とよばれる現象が報告されている。(1) (2) の設問に答えなさい。

(1) 社会的参照が、1～5 才くらいの子どもの日常生活の中で、どのような場面で観察される可能性があるか、具体的にいくつかの例を挙げなさい。

(2) 1～5 才くらいの子どもに対し、社会的参照を利用した心理的支援の計画を立てたい。どのような心理的あるいは行動の特徴がある子どもに、どのような支援の目標を立て、どのような支援計画を立てられそうかを具体的に記述しなさい。

【解答 or 解答例】

受験者が、対象年齢についてどう設定して解答するかにより、様々な視点からの解答が可能であり、いわゆる模範解答は提示しないが

(1) については

例えば離乳食などで親が味見をした際においしそうな表情をすれば子どもは安心して食べるが、親がまずそうな顔をすれば警戒する可能性もある。同じように、動物や昆虫への接近・回避、保育園への行きしぶりの際の親の表情、新規の場所や人を怖がるかどうか、など、広く関連している可能性があることなど、子どもの実際の姿を思い浮かべながら記述してほしい。

(2) については

例えば人見知りが強い時期に、久しぶりにあった祖父母に対して子どもが回避的な反応をする子どもがいる。その場合、親も祖父母はもちろん、子ども自身にとっても、可能ならば短時間で慣れてもらえるならばそれに越したことはない。そのような場合、人見知りをしている子どもをみて、親が困っているような表情をすれば子どもはますます警戒し、親が笑顔で安心した表情をしていれば、子どもも安心する可能性がある。支援計画としては「祖父母、親、子ども」が一緒にいる場面で、親が子どもに「安心できる表情や声」を積極的に呈示するという案が考えられる。このように上記(1)で記述した現象のうち、心理学的支援が有効であろうと思われる現象について、社会的参照と絡めながら記述することが求められる。

【出題意図】

四年生大学の心理学概論等で紹介される現象であるが、視覚的断崖実験装置を使って確認されたこの現象が、日常の子どもの生活でどのように観察され、また心理学的支援にどう応用可能かについて考察できているか、また、心理学の知識を実践的に応用しようとする意識を確認する問題である。